

豊臣七将の石田三成襲撃事件：歴史認識生成のメカニズムとその陥穽

著者	笠谷 和比古
雑誌名	日本研究：国際日本文化研究センター紀要
巻	22
ページ	35-47
発行年	2000-10-31
その他の言語のタイトル	The Attack on IshidaMitsunari by the Toyotomi "Seven Generals" : Mechanism and Pitfalls in the Formation of Historical Consciousness
URL	http://doi.org/10.15055/00000703

豊臣七将の石田三成襲撃事件

——歴史認識生成のメカニズムとその陥穽

はじめに

慶長三（一五九八）年八月十八日、秀吉は伏見城に六十二年の生涯を終えたが、世子秀頼はいまだ六歳の幼児であり、政権の前途は深い不安につつまれていた。これより先、自らの死期の近いことを悟った秀吉は五大老、五奉行から誓詞を徴して、秀頼への忠誠と私党による権力闘争の禁止とを誓約せしめた。さらに前田利家には大坂城にあつて秀頼の後見をなすことを託すとともに、家康には伏見にとどまつて公儀の政務を司ることを要請し、実力者たちの勢力均衡を図ることで、秀吉没後の政治の安定に意を用いた。

しかしながら、翌四年閏三月三日に秀吉のあとを追うようにして前田利家が没すると、またもや政治的バランスは崩れ政情は不安定なものとなった。そして利家の死とともに勃発したのは家康をめぐる

る抗争ではなく、豊臣系武将たちの石田三成に対する襲撃計画であった。

これより先、朝鮮の陣の通りの作戦および論功行賞のことをめぐって武将たちと軍目付との間で対立が生じていたのであるが、その憤りの鋭先が軍目付たちを統括する立場にあつた三成に向けられた⁽¹⁾。そして右の問題を機として、かねてから武功派の諸大名が吏僚派たる奉行衆に対して抱いていた反感が爆発し、その押えともなつていた前田利家が没したことで、武功派諸将が武力行使に踏み切ったものである。すなわち加藤清正・浅野幸長・蜂須賀家政・福島正則・藤堂高虎・黒田長政・細川忠興の有力七将が相謀つて、石田三成を討つべく大坂で軍勢を動員した。

これに対して右の襲撃の企てを事前に察知した三成は、かねて昵懇の佐竹義宣の助けをえて大坂をのがれて伏見に至り、伏見城内に

笠谷和比古

ある自己の屋敷に立て籠もった。そして三成を追って伏見に来った加藤らの武将たちの軍勢と、伏見城内にある三成と城壕を間にして睨みあいの状態となったのであるが、このとき家康が仲裁に入って和談を取りまとめられることとなるのである。

本事件をめぐっては、周知のように、伏見に逃げ来った三成が徳川家康の屋敷に自ら身を投じて、死中に活を求める行動に出たなどという形で長く信じられてきたのであるが、これは全くの誤りである。三成が七将の追撃を受けて伏見に難を逃れたのは事実であるが、三成の入ったのは家康の屋敷ではなくて、伏見城内にあった自分自身の屋敷であった。

しかし伏見において三成が家康の屋敷に逃げ込んだというのは、われわれにとって余りに著名なエピソードとして知られている。それは、ただに時代劇のストーリーとしてあるだけではなく、関ヶ原合戦を取り扱った史書、専門研究書においてもまた、おしなべて同様の記述を行っていることなのである。⁽²⁾

私は拙著『関ヶ原合戦』（講談社メチエ、一九九四年）を執筆している過程の中で、この問題に気付いた。すなわちこの事件の事実関係を記した原拠となる一群の史料を点検した結果、右の事実認識に根本的な誤解のあること知り、同書においてその旨を指摘した。

しかしながら、三成が家康の屋敷に逃げ込んだとする見方は、一世紀以上にわたって語り継がれ、そして余りに多くの権威ある論著

において繰り返し論ぜられてきたことによって、すでにして我々の中に牢固とした歴史常識として定着しているためでもあろう、前掲拙著のささやかな指摘ぐらいではこの常識を完全に払拭するにはいならず、いまなお依然としてそれが語られることのあるのが実情である。それ故に本稿では、この問題を徹底的に検証することとしたい。

本問題を論文のテーマとして殊更に取り上げるのは、秀吉没後から関ヶ原合戦にいたる政治史を正しく再叙述するという課題によることもさることながら、ここには歴史の常識が形成されていくメカニズムをめぐると興味深い問題が伏在しており、そのメカニズムによってもたらされる歴史認識の陥穽についても、教えてくれるところが少なくないと考えるからである。

一、三成の家康屋敷への逃亡説を検証する

1. 諸記録による三成逃亡状況の検討

豊臣七将の三成襲撃事件を書きとめた当時の記録の幾つかを見るところから始めよう。まずは先入観を捨て予断を差し控え、それらを冷静に眺めることによって我々の認識を洗い直していこう。

秀吉の死の前後から関ヶ原合戦に至る時期の政治情勢の推移をかなり忠実に記した『慶長見聞書』⁽³⁾なる一書には、七将の襲撃計画をめぐって、「治部少輔を女の乗物にのせ、佐竹（佐竹義宣）と同道

して浮田（宇喜多秀家）被_レ居候備前嶋へ参り談合あり。内府（徳川家康）へ此事を申入、何とそ無事に可_レ仕よしにて伏見へ赴く。秀家より家老をそへ佐竹同道あり。伏見にて治部少輔屋敷は御本丸の次、一段高き所なり」と記す。そして七将は伏見まで追いかけて来たけれども、「城へ入へき様なければ向島に控へ、此由を家康公へ申入れらる」とするのである。

三成が伏見に來つて身を置いた場所について、家康の侍医板坂卜齋の『板坂卜齋覚書』⁽⁴⁾には「治部少、西丸の向の曲輪_{くまわ}の屋敷へ参着」としている。同書の著者板坂卜齋は家康の侍医として関ヶ原合戦當時に家康に近侍して、実際の有様を見聞することのできた人物であることから、同書の史料価値はきわめて高く、関ヶ原合戦研究の根本史料の一つと目されている。その叙述が右のとおりであることに注目されなければならない。伏見城西丸の向かいの曲輪にある屋敷、それは三成自身の屋敷であろう、そこへ到着したというのである。

軍学者宮川尚古の『関原軍記大成』⁽⁵⁾は関ヶ原合戦関係の記録・聞書の諸説を総合し、二十数年の歳月を要して編纂された関ヶ原軍記の集大成版（延宝三「一六七五」年起稿、正徳三「一七一三」年成稿）であるが、同書においても「三成は伏見の城内に入りて、我屋敷に楯籠もる」とされていて、記述は疑いの余地が無いほどに明確である。

このように徳川時代の諸記録の多くが、豊臣七将の襲撃を避けた三成が伏見で身を落ち着けた場所を、伏見城内の自己の屋敷としているのである。

これに対して、三成が家康の屋敷に逃げ込んで保護を求めたとするのは、一八世紀初頭に江戸で活動した兵学者大道寺友山が家康の一代を編年風に纏めた『岩淵夜話』⁽⁶⁾（元禄末、宝永初年頃成立）の記述である。七将に追われた三成の行動について同書では、「佐竹右京大夫義宣、伏見におゐて此事を聞、三成と入魂なれハ、夜中に大坂へ下り、直に三成か宅へ行、今度の義ハ理を非に曲て、家康公をねかひいれずしてハ埒明ましと異見に付、宇喜多秀家へ留守の義を頼置て夜に紛れ、女乗物にて伏見へ登り、今度の危き難を御救可_レ被_レ下旨奉_レ歎」として、三成は佐竹義宣に同道されて伏見に至り、そのまま家康の庇護下に入ったとする。

そして七将からの三成引き渡し要求に対して家康は、「身の置所なきままに家康を頼ミ来候を、日頃不快なれハとて押出し候事ハ不_二罷成_一、今度の義ハ家康に対し堪忍頼入候」と返答したとしている。同書においては、三成は家康の屋敷に匿われたという認識を示しているのである。

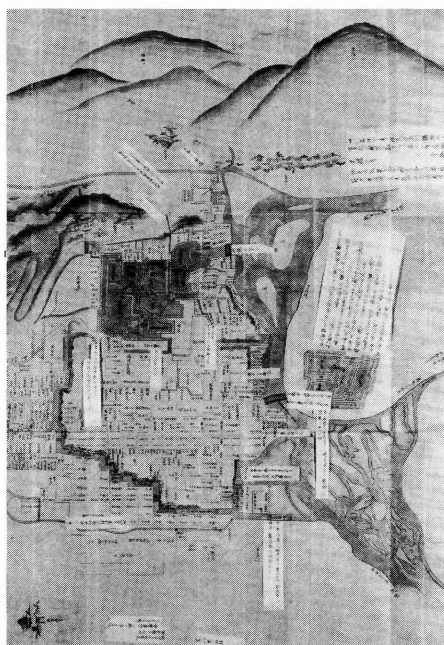
しかしながら、大道寺友山は後年の述作において、この認識を訂正することとなる。友山は『岩淵夜話』を著して後、その叙述の不備を改め、内容を増補する意図をもって、その改訂版と目すべき

『落穂集』(享保一二「二七二七」年成立)を編んでいる。

同書においては本事件の経緯は次のように記されている。「大坂を出て道中何の子細もなく、其日の晩景に至り伏見の屋敷へ着致し、義宣には直に向島の屋敷へ被_レ参、御対顔の上にて大坂騒動の次第并帰宅の節、三成を同道被_レ致候儀などをも委細に被_二申上_一候、且家康公被_レ仰候は、右出入の義を我等も聞及ひ候(中略)其元下向あられ、三成を当地へ御同道と有_レ之は重畳の事ニ候、治部少、当地に罷居候上にては、何様ニも致しよき事ニ候と御挨拶被_レ成候となり」と。

すなわち石田三成は佐竹義宣に伴われて晩方に伏見の屋敷に到着した。それより義宣は直ちに伏見向島にある家康の屋敷を訪れ、家康に対面のうえ大坂における七将蜂起の騒動の次第と、自分が伏見に戻る際に三成を伴ってきたことなどを詳しく語った。これに対して、家康は今回の騒動については心を痛めており、義宣が大坂に下向して三成を伏見まで連れてきたことは誠に結構なことである。三成がこの伏見の地に居ることは、問題を処置する上でいずれにしても好都合なことである旨の御返事であった、ということである。

つまり、ここで家康の屋敷に赴いているのは佐竹義宣であり、三成ではない。三成は伏見の地に来ているが、それは家康の屋敷ではないということである。すなわち大道寺友山は従前の『岩淵夜話』の叙述を訂正して、三成は伏見の自己の屋敷に入ったという認識を



伏見城絵図

示しているのである。

以上のごとく、徳川時代の諸記録はおしなべて、伏見に来った三成が身を落ち着けたのは三成自身の伏見屋敷であるとしているのである。それも『慶長見聞書』『板坂卜斎覚書』『関原軍記大成』の諸書によるならば、伏見城内にあった三成の屋敷ということである。その位置は本丸に続く一段高い場所とも、西丸の向いとも記されている。

これは恐らく、伏見城のいわゆる「治部少丸」(「治部少輔曲輪」)を指すものであろう。秀吉の伏見城の曲輪の構成は、右の城絵図に見えるように本丸、西丸を圍繞する形で複数の曲輪が配されているが、これらは「治部少丸」「右衛門丸」「大蔵丸」など豊臣奉行衆の

名前（石田治部少輔三成、増田右衛門尉長盛、長束大蔵大輔正家）が曲輪の名称として付されており、各奉行がそれぞれの中に自己の屋敷をもつと同時に当該曲輪の管理の任を帯びていたのである。

そして当然にも石田三成の屋敷は、ここ「治部少丸」の中にあつたわけである。大坂を脱出して伏見まで来つた三成が、自らの身の安全を確保するためにたどりついた場所が、伏見城の曲輪の内なる自己の屋敷であつたというのは、考えてみれば余りにも当然のことではないであらうか。

なお、この時期の同時代史料として著名な興福寺多聞院の日記である『多聞院日記』⁽⁸⁾の慶長四年閏三月九日条には、次のように記されている。「伏見治部少輔・右衛門尉（増田長盛）・徳善院（前田玄以）一所ニ取籠由候、乍^{あつかい}去^{あつかい}（扱）在^{あつかい}之由候」と。すなわち、この伏見の騒動に際して三成は、増田長盛や前田玄以と一緒に、同一の場所に立て籠もつた（そして仲裁和議がなされた）とするのである。

この年正月十日に豊臣秀頼が大坂城へ移つてからは伏見城は主の居ない明城となつており、五奉行が交替で在番を勤めていた。そしてこの事件の当時は前田玄以が伏見城の在番を担当していたことが判明するので、右の日記において玄以と一緒に（同一の所に）立て籠もつていたということは、石田三成がこの時、伏見城内にあつたことを確認してくれることになるのである。

徳川時代の前掲諸記録の内容、および同時代史料としての『多聞院日記』の記述からして、豊臣七将の襲撃を避けて伏見に来つた石田三成が身を置いた場所が伏見城内の三成自身の屋敷であることはもはや動かしようがない事実であると考えるのである。

それでは何故に、三成は家康の屋敷に逃げ込んだという「史実」を、われわれはかくも長きにわたって信じ込んできたのであろうか。それがどうして疑いの余地を容れることなき牢固たる常識として、心に抱き続けることとなつたのであろうか。この歴史の陥穽がどのようにして形成され、われわれを呪縛していたのか、その由来を明らかにしておく必要があるであらう。

2. 従前の定説の形成事情

関ヶ原合戦をめぐる史書、研究書は夥しく出版されているけれども、そのほとんどは論評的なものであるという事実、に、まず留意する必要がある。

関ヶ原関係の書物の一方のタイプは、関ヶ原合戦における武将たちの戦略や行動の中に今日につながる教訓的な意味を見いだそうとするものであり、他方のタイプはより学術的な観点から、同合戦の近世幕藩体制の成立に及ぼした政治上の意義を追究しようとするものであるけれども、いずれの場合にあつても、同合戦の経緯やその事実関係はすでに知られているものとして議論は進められる。

それらの事実の間の因果関係や、それらの事実を前提とした戦略の意味やその良し悪しを解説することに終始して、議論の前提となっている事実関係そのものが、果たして従前の理解でよいのかどうかについて、立ち入って吟味しようとする態度はあまり見られないようである。

関ヶ原合戦をめぐる事実関係については、従来、ほとんどのところ次に掲げる二著の叙述に依存し、そこで確定された事実認識を踏襲するのが常であったと言えよう。そして三成襲撃事件をめぐる誤認もまた、この二著に淵源を求めることになるのである。

その二著の一つは旧陸軍の参謀本部戦史課において編纂された『日本戦史・関原役¹⁰』であり、いま一つは徳富蘇峰著『近世日本国史・関原役¹¹』である。これらは明治・大正年間に編纂されたものであるけれども、いずれの書物ともに関係史料を博搜網羅して考察を進めるといふ厳格な態度を持っているがゆえに、その叙述は正確で信賴の置けるものとなっており、今日に至るも、関ヶ原合戦の経緯をめぐる事実関係については、歴史小説も史書も研究書も、専らこの二著の叙述に依存してきたという事情がある。研究者の史観やイデオロギー的立場をも超えて、この二著は歴史における事実関係の局面を支配してきたのである。

私自身もこの両書の価値を高く評価することにおいて、決して人後におちるものではない。しかしいかなる良書といえども、人間の

なす業である以上は誤謬を免れえないという事もまた否定しうべくもないであろう。

この二著に対する信賴はきわめて高いものであるだけに、この両書の叙述に誤りがあるときには、後続の諸書の叙述もまた押しなべて誤りを踏襲していくこととなる。かくして誤謬は層をなして堆積し、もはや誰も疑わなければ逆らうこともできない、牢固たる常識となつて確立されることとなる。

三成襲撃事件の経緯について『日本戦史・関原役』はつぎのように記す。すなわち七将の襲撃計画について、「佐竹義宣、三成と旧見¹²に還り家康に投ず。七将追ひ来りてこれを家康に請ふ。伏見ために騒然たり。家康思ふ所あり允さず」と。同書は漢文体で記されているために叙述は簡潔であり、そして問題の原因をなすことになったのは「三成を擁し伏見に還り家康に投ず」の一文であった。

かなり、あいまいな表現ではある。典拠としては先述の『慶長見聞書』あたりが推測され、その「内府（徳川家康）へ此事を申し入れ、何とぞ無事に仕るべきよしにて伏見へ赴く」といったような表現が、同書の叙述のもととなっているのであろう。

右の文章については、編者の真意は、三成問題の解決を家康に委ねたということであったかとも思われるのであるが、あるいはここで既に、編者の中において誤解が発生していたのかも知れない。

というのは、この三成襲撃問題を解決の時点で見た場合には、七将の武力行使を抑えて仲裁解決を行ったのが家康であること、そして隠退を承諾した三成を、近江佐和山の居城まで護衛して送り届けたのが家康二男の結城秀康であったことから、三成が伏見に来た当初から家康の保護⁽¹²⁾下にあったような印象を生じやすい状況にあったからである。

そしてそこに前掲『岩淵夜話』の記述（それは筆者の大道寺友山も後に訂正した誤伝ではあるが）の記憶が編者の頭に残っていたとするならば、一連の事態がこのような形で表現されることになったのも、止むを得ないことであろう。

そしてそのような事件の推移をめぐる構図は、徳富著『関原役』において明確に確定されてしまうこととなる。すなわち同著においては、「佐竹義宣またこれを聞き、三成の邸に赴き、彼を女乗物に乗せ、先ずこれを宇喜多秀家の邸に送り、更に護衛してこれを伏見に⁽¹²⁾抵^{いた}らしめ、家康に托した。今や窮鳥は愈々狎夫の懐に入つて来た」と叙述される。蘇峰はさらに続けて、「石田の此の挙は、彼としては最善の策であった。彼は実に死中活を求めたのだ」と断ずるのであり、三成が家康の屋敷に逃げ込んでその保護を求めたということは、ここで確かな史実になってしまふのである。

この二著の叙述を対比してみよう。徳富著の叙述「更に護衛してこれを伏見に^{いた}抵らしめ、家康に托した」は、参謀本部編『日本戦

史・関原役』の叙述「三成を擁し伏見に還り家康に投ず」をまったく踏襲しているわけである。徳富はこの点では独自の史料吟味を加えることなく、『日本戦史・関原役』をそのまま再述しているだけなのである。そして徳富著に見えるその他の叙述、すなわち「今や窮鳥は……」とか「彼は実に死中活を……」などは論評であって、史料に依拠した事実の分析ではないということである。

そして徳富著はさらに、この問題の箇所に「家康、石田を保護す」という節の題名を掲げたことによって、三成が家康の屋敷に逃げ込んで家康に保護されたという「事実」は、もはや疑いを差し挟む余地のないものとなってしまったのである。

これ以後の諸書の叙述はこの二著、ことには徳富著の叙述に依拠し、それを祖述するにとどまる。そしてそれら夥しい書物において叙述されているのは、三成が何故に家康の屋敷に逃げ込んだか、また家康が何故に三成を保護したかの意味と解釈をめぐる論評なのである。

実に一世紀以上にわたって議論は繰り広げられてきたけれども、論評ではなく、事件の事実関係そのものの吟味については不思議なことに、誰も手をつけようとはしなかった。史料について言うならば、関ヶ原合戦に関しては最も著名にして史料の価値が高く、誰でも引用書として掲げる先述の『板坂卜斎覚書』を見ただけでも、事実の食い違いに気がつく筈であるし、また気がつかねばならないの

であるが、全く等閑に付されたままであったのである。

ここに歴史の陥穽がある。前掲二著の信頼性が甚だ高いために、われわれはそれに安易に依存し、その叙述―特に事実経緯に関する叙述―を踏まえて解釈的な議論を展開するために、事実関係に関する認識は基本著書のそれを無批判に再生産することとなる。それが一世紀以上の長きにわたって繰り返され、そしてその中には高名な学者の面々の権威ある書物も数多く含まれることによって、最早それは何人も疑いを差し挟むことのない歴史の常識として定着することとなってしまっているのである。

3. 家康書状を根拠とする近年の議論について

以上の検討によって、豊臣七将に追われて伏見に來った三成の逃げ込んだ場所が、家康の屋敷ではなく、伏見城内の彼自身の屋敷であったことは明らかになったかと考えるのであるが、それでも一部には、今なお三成が家康の屋敷に逃げ込んだことに固執される向きもあるようなので、最後にそれに言及しておこう。

三成が家康の屋敷に逃亡したとする説を、近年なお主張される方々の根拠とされるのは次の史料である。⁽¹³⁾

重而御折紙被^レ入^二御念^一之通、祝着之至候、如^レ仰此方^え被^二罷越^一候、尚替儀候は從^レ是可^二申入^一候、其地御番之儀、兩人

如^二被^レ申候^一被^レ成之由、尤候、万事能様肝要存候、委細井伊兵部「井伊直政」かたより可^レ申候、恐々謹言

閏三月五日 家康 御判

丹後少将「細川忠興」殿

蜂須賀阿波守「蜂須賀家政」殿

清洲侍從「福島正則」殿

藤堂佐渡守「藤堂高虎」殿

黒田甲斐守殿「黒田長政」殿

加藤主計頭殿「加藤清正」殿

浅野左京大夫「浅野幸長」殿

これは三成の襲撃を企てた七将が家康に宛てた書状（「御折紙」）に対する、家康の返書である。この返書の宛所から、この時に蜂起した豊臣七将というのが右に記された七名であることが確認されるのであるが、さて、三成が家康の屋敷に逃げ込んだという説に固執される方々の根拠は、右の文中に見える「如仰此方^え被罷越候」という一文が、そのことを示唆しているというものである。

右の書状は、この事件当時に当事者間で授受された第一次史料であるから、その内容が尊重されなければならないことは当然である。それ故に、ここは疑念を残す余地がないように徹底的に論究してお

く必要があるであろう。

この家康返書についての私の解釈は次のとおりである。「如仰此方え被罷越候」の文意は、それが仮に三成の行動を指すものと見た場合でも、それは家康屋敷ではなく、伏見の地へ来ったことを意味するものとして問題はないのである（それは次に引用する同じ時の書状に見える「此方」が、家康の屋敷ではなく、伏見の地を指していることからして明らかである）。

しかし、そもそも右の書状に記された「此方え罷越候」という一文は、三成の行動を指すのではなくて、豊臣七将たち自身の行動を指すものとして捉えるのが正しいのである。それは次に掲げる史料と引き合わせて検討するならば、自ずから氷解する問題なのである。

被_レ入_二御念_一御飛札、祝着之至候、此方え人数召連被_二罷越_一候由、被_二仰越_一候、相意得申候、弾正〔浅野長政〕具可_レ被_レ申候、猶自_二兩人_一可_レ申候間、不_レ能_レ具候、恐々謹言

後三月五日

家康 御判

浅野左京大夫〔浅野幸長〕殿

これは七将の一人浅野幸長から、同じ時に家康に提出された書状に対する家康の返書である。⁽¹⁾この文章の内容は次のとおりである。

浅野幸長からわざわざ私（家康）の下に書状を送られ喜ばしいことである。幸長はこの伏見の地へ軍勢を引き連れて到着されたことを、書状をもって私まで報告され、確かに承知をした。この件について詳しいことは、奉行の浅野長政や取り次ぎ役の兩人（これは不明）から説明するであろう、ということであろう。

つまり先の七将宛の家康返書にあった「如仰此方え被罷越候」とは、この浅野の場合と同じく、七将が軍勢を率いて伏見に到着したことを指しているのであり、そのことを七将が書状をもって家康に通報した文面を、家康が返書の中で確認した文章なのである。

当時の書状の作法において、来書に対する返書を認める場合には、来書の文面を承知の意味を込めて反復記載するのを常としていたというのである。

右に掲げた二通の返書のうちでは、浅野宛のものが先で、七将宛のものは後である。七将宛の返書の冒頭に「重て……」と記されていることから、それが浅野に続く二度目の書状に対するものであることが分かるであろう。それ故に、一度目の浅野書状に対する返書に認めた「此方え人数召連被罷越候」を、二度目の返書では省略して、ただ「此方え被罷越候」と記したということであろう。

当時、家康の伏見屋敷は宇治川を渡った向島の地にあって、木幡山に築造されていた新しい伏見城とは地理的に離れていたことから、このような使いを用いた書状のやり取りとなっている訳である。

そして、七将宛の家康返書の後段に見える「其地、御番之儀」

云々とは、伏見城下に入り込んだ七将たちが伏見城の周囲を戒厳体制に置き、同城を封鎖して、城内の三成を制圧する挙に出たことを指しているかと解するのが妥当であろう。

従前、この「其地、御番之儀」は大坂における番を指すものと解釈されてきたのであるが、三成がいなくなった大坂での番というこの意味が判然としないだけでなく、浅野幸長が軍勢を率いて伏見に来ったという幸長宛の家康返書に記された内容と矛盾してしまうのである。これは大坂における番ではなくて、軍勢を引き連れてきた七将が木幡山の伏見城下に集結して、その地で同城を包囲すべく軍隊を配置している状況として捉えることによって、二通の家康返書の内容はすべて整合的に理解することができる⁽¹⁵⁾と考える。

ながながと縷述してきたが、いったん牢固として確立されてしまった歴史の常識を変更させるということが、いかに難しいものであるかを改めて痛感させられる問題であった。

家康が何故に七将の攻撃を受けた三成を助けたのかという設問も、三成が家康の屋敷に逃げ込んだという事実認識が崩れてしまえば、かなり意味合いの異なったものになってしまうであろう。

実際に生起した状況は、三成が伏見城内の自己の屋敷に立て籠もり、七将の側は城の外にあって両者にらみあいのまま相対峙するという事態であり、そして次いで、家康がその調停に乗りだして問題

の解決を見たという性格のものであった。

七将側の武力行使を戒めてその鋒を収めさせ、三成の命を助けて居城の佐和山まで護送したというのは、公儀を与る立場の家康としては当然の処置であると言わねばならない。もし家康が七将たちの武力行使を黙認するようなことがあれば、政治秩序はアナーキーに陥ってしまい、家康の政治指導力そのものが危殆に瀕することにもなりかねないであろう。

このケースにあつては、七将の武力行使を抑え、そして宿敵三成を公儀の権力中枢から追放して隠退に追い込むというのが、家康にとって最適の戦略行動であり、それによって家康の政治指導者としての威信はゆるぎなきものとなることであろう。

事実、この問題の平和的解決を通して家康に対する世望は高まり、彼は向島の屋敷から居を移して伏見城に入ることとなる。そしてそのことによって、家康は公儀の事実上の主宰者としての立場に立つたことを明らかにするのであり、世の人々もまた、その伏見入城をもって家康が「天下様」になったという受け止め方をしたのである。家康が名実ともに天下人となるためには、なお関ヶ原の合戦と征夷大將軍任官という出来事を待たねばならないが、それらをめぐる問題は、もはや本稿の議論の範囲を越えることになるであろう。

むすびに

慶長四年の豊臣七将による石田三成襲撃問題の経緯については、以上に述べたとおりである。これらの議論によって、秀吉没後より関ヶ原合戦にいたる政治史の展開についての理解に、少なからぬ修正をせまることになるであろう。その政治史上の跡付けとその解釈の変更に關する詳細については、前掲拙著『関ヶ原合戦』の叙述を参照いただければ幸いである。

ここでは本事件をとおして露呈された歴史認識上の問題について、改めて指摘をしておきたい。本事件をめぐる議論は、はしくも我々の歴史認識を形成していくメカニズムと、そしてまたその陥穽についても興味ある論点を提示してくれている。

本事件をめぐる権威ある書中の、ささいな、そして不用意で曖昧な表現が、後続のこれまた権威ある書物によって追認され、より明確な表現が施されることによって、確固たる事実認識が成立してしまう事情を示してくれている。そしてそれらの論述が後続の論著によって無批判に祖述されていくことによって、その事実認識は再生産され、さらには後の時代の高名な学者たちの論著の中でも再述されることによって、いつしか何人も疑いを差し挟む余地のない歴史の常識として定着してしまうこととなるのである。

興味深いことは、この両著の一つは陸軍参謀本部の編纂にかかる

ものであり、いま一つは国家主義者の名も高い徳富蘇峰の著作であるにも拘わらず、これら両著が提示している事件の事実認識については、政治的立場を異にする研究者であっても、これを踏襲していく点において何ら変わりがないという現象である。事件の意味づけや評価、歴史的な因果関係の設定をめぐることはこれら両著に対して批判的である人々も、事実関係に關する認識については、ほとんど無批判にこれら両著の論述を受け入れてしまうのである。

われわれは往々にして、歴史時代の著名な事件や出来事を所与のものとして、あたかも自然的事実であるがごとくに受け入れてしまう傾向があるようである。考古的時代については、遺跡の発掘が報告されるたびごとに、その認識が日々更新されていく印象をもつのであるが、歴史時代の事柄についてはその殆どを既知のものと思なして疑うことをしないようである。

しかしながら、われわれが心の中に描いている歴史的事実は、決して自然的事実ではなく、われわれの歴史認識の所産としての事実であることが忘れられてはならない。そしてそれにも拘わらず、その歴史的事実に関する認識がイデオロギー的党派の別を超えて客観的な妥当性を保持しうるのは、その根拠となる史料の存在であり、史料操作のルールが存在なのである。

陸軍参謀本部や国家主義者徳富蘇峰の手になるものでありながら、イデオロギーの別を超えて、この両者の著述が歴史的事実の認識の

世界において絶大な權威を有していたのは、第一次史料たる文書・記録を基本とする膨大な史料の博搜と、その史料操作の厳密さについて信頼を勝ち得ていたがゆえのことである。

そこからして、この両著において史料解釈の誤りであれ、状況証拠に基づく錯誤であれ、そこに過誤が生じているときには、後続の論著はその過誤を再生産して、不動の常識として定着させていく危険性が高いということを意味する。本稿で取り上げた石田三成襲撃の一件は、はしなくもその歴史認識の陥穽が発生した所以を露わにしてくれたが、実は同様の危険性はいたるところに伏在しているということである。われわれにとって所与のものとして現れているなじみ深い歴史的事実の多くが、その可能性を孕んでいることを本稿の一件は意味しており、その警告を発しているのである。

歴史認識の相対性をめぐる議論は、往々にして、イデオロギー的党派の別に由来する史観の相違や、時代的価値観や社会的要請の変動に基づく歴史認識のパラダイム変換に由来するような次元の問題として受けとめられているのであるが、この種の認識上の相対性の問題は充分に理解可能なものであって、必ずしも学問の根本を揺るがすものでもない。

歴史学にとってより根本的であり深刻な課題は、歴史学的な全分野にわたって無数に伏在しているであろう歴史的事実そのものの把握をめぐる潜在的な危険性の問題であり、その確定と流動化との不

断の相克の問題に他ならないことを指摘して、本稿は擱筆することとしたい。

注

(1) この事件の直接の原因は、慶長の役で名高い蔚山籠城戦のおりの働き、およびその後に顕在化してきた戦線縮小措置をめぐる処分問題であった。拙稿「蔚山籠城戦と関ヶ原合戦」(『倭城の研究』第二号、一九九八)。

(2) 試みに信頼度の高い論著よりその二、三を引くならば次のとおりである。「前田利家の没した閏三月三日の夜、加藤清正・黒田長政・浅野幸長・福島正則・池田輝政・長岡忠興・加藤嘉明の七将が、自分の出づるを待って要撃しようと企てることを知った石田三成は、佐竹義宣の尽力に依り、危きを逃れて四日伏見に到り、政敵家康の許に身を投じた。七将はその後を追って伏見に來り、三成を引渡されんことを家康に求めた。そのために伏見の物情洶々たる有様であった」(中村孝也『新訂徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、一九八〇年、三九七頁)。「利家逝去の夜、加藤清正・黒田長政・細川忠興・池田輝政・加藤嘉明・福島正則・浅野幸長の七人の武将は、直ちに三成襲撃の挙に出た。(中略)三成は利家の邸から脱出して一旦自分の家に帰り、ついで佐竹義宣の機転の処置で、宇喜多秀家の屋敷に逃れ、さらに伏見に赴いて、家康の保護を求めた。加藤らの七将は三成のあとを追って伏見に至り、三成の身柄引渡しを家康に申し入れた」(今井林太郎『石田三成』吉川弘文館、一九八八年、一

- 三三頁)。「利家が死去した夜、朝鮮出兵以来、石田三成に遺恨をもっていた加藤清正、黒田長政、浅野幸長ら七人の武将が、三成を亡き者にしようと動いた。それを察した三成は、よりにもよって対立する家康の伏見屋敷に逃げ込んだ。諸将は三成の引き渡しを家康に求めたが、家康はこれに応ぜず、三成を彼の居城である近江の佐和山へと送り届けた。こうして五奉行の中心的存在であった三成が失脚したことで、五奉行の一角も崩れた」(藤井讓治『日本の歴史12・江戸開幕』集英社、一九九二年、一七頁)。
- (3) 国立公文書館内閣文庫蔵
- (4) 『慶長年中卜斎記』(『改定史籍集覧』第二六冊)。
- (5) 黒川真道編『国史叢書』(国史研究会、一九一六年)。
- (6) 東京大学史料編纂所蔵。
- (7) 林述斎監修『朝野旧聞哀藁』(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』特巻、汲古書院、一九八三年)所収。
- (8) 辻善之助校訂『多聞院日記』。
- (9) 同年閏三月十三日に、家康は向島の屋敷から移って伏見城に入るが、この時に同城の在番が前田玄以であったことが知られる(前掲『関原軍記大成』巻之三、前掲『朝野旧聞哀藁』閏三月十三日条)。
- (10) 陸軍参謀本部、一八九三年。
- (11) 民友社、一九二二年。
- (12) 前掲徳富著、第五章二節「家康、石田を保護す」。
- (13) 『譜牒余録』二十二「松平安芸守」(『内閣文庫影印叢刊』、国立公文書館、一九七三年)。
- (14) 同前。
- (15) 一世紀余にわたって頭脳に沈着してしまった常識は、いまだ簡単に拭い切れないものと見えて、私の説は一応考慮しつつも、なお旧説に固執して、三成は「伏見城内にある家康の屋敷に助けを求めて」きたなどという叙述が、専門研究者の文章の中に現れることともなっている。しかしながら、この叙述は二重の意味で誤りである。三成が家康の屋敷に助けを求めたという点も誤りであるが、それ以上に、家康の屋敷がこの事件の時に伏見城内にあるというのは、とんでもない事実誤認である。家康が伏見城内に入り、そこに居を構えるようになるのは、この三成襲撃事件が解決してのちの閏三月十三日のことである。それまでの家康の屋敷は宇治川対岸の向島の地に位置していて、これは木幡山に曲輪をめぐらす伏見城とは全く別の場所なのである。向島の伏見廃城(指月の旧伏見城の出丸)と木幡山の伏見城とを混同したことによる謬見であると思われるが、このような基礎的な誤りは論外と言わねばならない。